

【ポスター発表】

高齢者の看取りにおける介護職と看護職の連携に関する文献レビュー

○ 城西国際大学 氏名 二宮 彩子 (010389)

小川 智子 (城西国際大学・005659)

キーワード3つ：高齢者・看取り・連携

1. 研究目的

多死社会に突入し、在宅及び施設等における看取りのための環境の整備が求められている。中でも、核家族や独居高齢者の増加及び高齢者施設入居者数の増加に伴って、介護職の役割は益々重要視されている。それと同時に、看取りにおけるチーム医療の重要性も再認識されている（藤田ら 2023、Helena Temkin-Greener et al.2018）が、これまでに、高齢者施設や在宅において看取りケアの実態を明らかにした研究はあるものの、その数は十分とは言い切れず、また、介護職と他職種との連携に焦点を当てた研究も少ない。今後高齢者の看取りケアについての研究を進め、その質の向上を図っていくことは急務であり、そのためには、看取りにおける介護職と他職種の連携に関する研究の動向をまとめ、今後の課題を検討していく必要がある。本研究では、他職種の中でも、より多くの連携を必要とする看護職に焦点をあて、高齢者の看取りにおける介護職と看護職の連携について国内外の文献をレビューし、その内容を明らかにすることを目的とした。

藤田 俱子他(2023), 在宅看取りにおける多職種連携の内容に関する文献検討, 千里金蘭大学紀要, 20, 089-096

Helena Temkin-Greener, et al. (2018). Impact of Nursing Home Palliative Care Teams on End-of-Life Outcomes, *Medical Care*, 56(1): p 11-18

2. 研究の視点および方法

国内の研究論文の検索には、『医学中央雑誌』の Web 版（医中誌 Web）を用いた。検索期間は 2020 年～2025 年に発表された論文とし、文献の属性は「原著論文」「本文もしくは抄録あり」に限定した。検索キーワードは「高齢者」「介護」「看護」「看取り or ターミナルケア」「連携」とし、すべて AND でつないで検索したところ、46 件であった。国外の研究論文の検索には、“PubMed” “CINAHL” を用いた。検索期間は設けず、検索時のキーワードは、(“end of life care” or “palliative care” or “terminal care” or “long term care”) (“helper” or “care worker” or “care giver”) nurse (“cooperation” or “Collaboration”) を And でつなぎ検索した結果、23 件が該当した。また、他の情報源から得られた論文 2 編を加え、以上の論文を概観し、重複している文献を除外し、表題、要約、本文から高齢者の終末期にかかる介護職と看護職の連携に関するものか否かを検討し、国内論文 13 件、国外論文 4 件（内、日本人著者 3 件）を本研究の対象論文とした。

3. 倫理的配慮

取り扱った文献については、著者の真意から逸脱することがないように留意した。また本研究は、科研費（23K10300）『在宅看取りを支える訪問介護員のための体験型看取り学びモデルの構築』（研究代表者：二宮彩子）により実施し、開示すべき利益相反(COI)はない。

4. 研究結果

1) 対象施設等：訪問看護ステーション 6 件、サービス付き高齢者向け住居（サ高住）4 件、介護老人保健施設 3 件、病院 2 件、認知症高齢者グループホーム 1 件、小規模多機能型居宅介護施設 1 軒、特別養護老人ホーム 1 件、有料法人ホーム 1 件、地域包括ケアセンター1 件、消防局 1 件、nursing home1 件、不明 1 件であった。

2) 研究方法：施設勤務者対象（介護職・看護職）のアンケート 3 件、訪問看護師対象のアンケート 2 件、訪問介護士対象のアンケート 1 件、施設の看護師対象のアンケート 3 件、施設の介護職対象のアンケート 1 件、訪問看護師、医師のインタビュー 1 件、施設の介護職対象のインタビュー2 件、医師、看護師、MSW、介護職、事務職、行政職に対するインタビュー2 件、家族介護者対象のインタビュー1 件、居宅介護支援事業所ケアマネジャー対象のアンケート 1 件、事例紹介 1 件であった。

3) 介護職と看護職の連携についての結果：在宅看取りにおける専門職の関わりについての実態や、施設における介護職からみた看護師との連携の難しさ、病院での事例を通しての連携の実際などが示され、看護師へ期待する役割（医療的サポートや関係づくり等）が明らかにされていた。また、量的分析を用いて自宅やサ高住での看取りを可能にする要因や、連携を促進する要因が明らかにされ、施設の専門家間の専門職連携が介護施設における終末期ケア量に影響することが示唆されていた。また、サ高住入居者のための支援指標の開発に関わる論文もみられた（因子のひとつとして「訪問介護職と訪問看護師の連携が在宅看取りを促進」が挙げられていた）。

5. 考察

研究対象としては在宅よりも施設の方が多く、対象職種としては介護職よりも看護職がやや多かった。これは高齢者施設において両職種の連携の課題が表出しやすいこと、そして著者がほぼ看護師であったこと等が起因していると思われる。また、海外論文は少なく、チーム医療において介護職と看護職の連携に特化する考え方が日本特有であることが考えられる。研究結果より、介護職と看護職との連携不足の現状がある一方で、介護と看護の連携が終末期ケアに効果があることが量的分析及び質的インタビュー分析から明らかにされ、今後さらに両者の連携を強化していく必要がある。そのためには評価も重要であり、看取り支援のための指標を活用することは、看取りケアの質向上に対して有効であると考ええる。